

実践を記録し、実践報告を書き、 学び合おう

NPO法人発達保障研究センター理事長

品川文雄



- ◇まず、日々の実践を綴ろう
→実践を記録する
- ◇私の思い、気づき、主張を込めた
実践報告を書こう
- ◇実践報告を深め磨くために、
サークルや学習会等で集团的に検討しよう
- ◇実践報告を書くうえで必要なこと
- ◇実践的力量を高めるうえで必要なこと

はじめに

◇赴任前の感動

田んぼの水はどこからくるのかな、から始まって、「どこから来るん」「どこに行くん」：子どものことばを拾って歩いているうちに学習のまとまりがでてきたん。川の合流点では「川がたしざんをしているんだ」なんていう子もいて、それで水源をみせなくなったわけよ。

新任ではじめての学校に赴任する直前（1972年）、私はある教育サークルの合宿研究会に参加した。二日目、互いの実践を語ろうと始まったのが、冒頭の報告。

それで、榛名神社の水源で川の誕生を遊びながら実感させたら、「川の赤ちゃんだ。こんなにきれいな水、新しいねえ、冷たくっていい気持ち。あとからあとからとびだしてくるんね」って、いうんだよね。

途中は省くが、「川が海にいくところを見たい」の聲に押され、親子遠足で河口に行き、川が海に注ぐ様子を見学して終わる壮大な実践である。

報告は続いたが、長さは感じない。むしろ、川の学習の心地よい世界のなかに引き込まれ、私も子どもの一人として心が躍り学びの楽しさを感じていた。こんな授業がしたい、子どもと一緒に学び合う教員になりたい、と

心から思ったことを今でも忘れない。

この川の学習を楽しげに、まるで目前で行っているかのように話されたのが坂爪セキさん¹⁾。大学時代感激しながら読み学んだ本の著者が、今、報告している、私にとっては夢のような時間だった。

ところが私の夢の時間を壊す人が現れた。「この川の学習は：」と解説が始まり細かく分析をおこなったのである。あの坂爪さんの実践に意見を言い注文をつけるとは、と聴いていると、その解説は一理も二理もあり納得、坂爪さんの実践の意味と意義がより明確になった。その後も語りは「セキちゃんはさあ」と碎けているが、どの発言も的を射ていた。坂爪さんは「理屈っぽくていけないや」といいながらも、それらの意見を受け止めていた。

これが私の「サークル初体験」である。こんな素敵な語り合い学び合いを私の周りにも作りたい、絶対仲間を作るぞと心のなかで誓ったのである。

*

誓ったものの埼玉に友人知人がほとんどいない。唯一の知り合いは、埼玉大学の清水寛さんと全障研埼玉支部の数人。障害児学級の新任で元気に発言する人がいたが、一緒にサークルをしませんかとはどうしてもいえなかった。そんなある日、たまたま駅のホームでその人を見かけた。勇気を奮って声をかけたのが、その後30数年

1) 坂爪セキ 1930年群馬県生まれ。1949年より教員となり、1962年からは采女小学校障害児学級の担任。著書に『生きる力をこの子らに一障害児学級12年の実践』（からたち文庫、1977年）がある。

2) 田村勝治 1916年群馬県生まれ。校長として赴任した学校で障害児教育に出会う。群馬の障害児教育研究サークル放談会や埼玉の障害児教育研究サークル麦の会で共同研究者をつとめる。

埼玉県草加市の障害児教育と一緒に作り上げ、後述する麦の会でも活躍した木村宰子さん。若手障害児学級担当者に声をかけ、日々の実践を語り合ったが、愚痴や悩みはいえども、実践をまとめ報告するには時間がかかった。

数年たち教職員組合の教育研究集会に提出したレポートは、教育実践ではなく草加市の教育権保障運動の歩み。当時、障害児の義務教育は保障されておらず、養護学校義務制の実現をめざし、全国各地で教育権保障の運動が展開されていた。運動では本人たち・親たちの教育へのおもいやねがいを学び、教員としての心棒のようなものを形づくることができたが、夜のほとんどは会議や集会に費やされ、今日の実践のまとめも、明日の教材準備もままならない状態が続いた。ジレンマが最高潮に達したとき、私は退職を考えた。妻・智子の「やめちゃダメ」の一言で退職は思いとどまったが、その後も実践づくりと障害者運動の両立は難しかった。

転機は1981年に訪れる。埼玉で障害児教育実践サークル「麦の会」が再建され、第1回例会の報告者は私。共同研究者は田村勝治さん²⁾。群馬で「実践に含まれない何かを『外から』付け加えて批評したりするのではなく、その実践のうちに含まれている大切な事実をていねいにすくい出す」実践検討を長年続けてこられた。事実に即さず何かの論を借りて実践を語ることに厳

しかった。品川報告は徹底的に批判された。実践の事実、子どもの事実でない部分をそぎ落とし、裸の品川報告を検討するための批判だったと今では思うが、そのときは悔しく、相当落ち込んだ。その後も私の報告には田村さんと麦の会メンバーから容赦の無い指摘があった。このように厳しくもあり温かい指摘をしてくれるのはサークルの仲間だからだと思う。そのなかで小生意気で頭でっかちの品川は更生した。

まず、日々の実践を綴ろう―実践を記録する

はやく「実践を記録し、実践報告を書く」を知りたいのに、と思った皆さん、そして、これは教員の実践のことで自分とは関係ない、と思った皆さん、そんなことはありません。これから一緒に考えていきましょう。

◇日々の実践の記録は第一歩

日々の実践の記録は、その実践のうちに含まれる大切な事実―どんな教材や活動を、どんな計画と手だてで、子どもに働きかけ、そのなかで子どもはそれらとどう向き合い、自らに取り入れつつ、成長・発達したかをすくい出すための大切な第一歩である。それはたやすくできるものでなく、実践の主体者である教員や支援者が、今持てる感性と知性を総動員し、微細なときもあれば劇的

なこともある発達の表れや変化に気づく力量を蓄える必要があるものである。いうまでもないが、これらにマニュアルがあるわけではなく、失敗や間違いをしつつ修正・訂正しながら経験を積み重ね、その力量を蓄える以外ないと思う。ここからは忙しい毎日を送った私の実践の記録の取り方を紹介する。

◇「記録ノートを毎日書く」もあるけれど

日々の実践の記録を書くことは大切だが、言うは易く行うは難し。担当する授業や活動の様子、子どもたちの細かな様子を記録することは相当なエネルギーと時間が必要である。職場は種々の会議が盛りだくさん、その準備をしなくてはならず、まして私のように夜の会議がびっしりでは、放課後ゆつくり実践や子ども一人ひとりを振り返ることは難しい。忙しさにかまけ、記録を書くことをサボることが多くなる。サボれば、とたんに実践の進むべき方向を見失い、取り組むべき子どもの課題がわからなくなる。すると、日々の授業に緊張感が失われマンネリ化が始まり、子どももどうして良いかわからず右往左往する。これに対し、当たり散らしたり怒鳴ったり怒ったりするようになる。私はたびたびこの負のスパイラルに陥った。この状況を打開する最善の策は、記録ノートを書き授業や子どもの課題を日々振り返ることである。難しいことでなく実践したら、活動内容・働きか

け・子どもの様子を一文字で良いからメモすることから始まるのだと思うが、それがなかなかできなかった。

この点で、『みんなのねがい』2016年5月号（特集「実践を創造し、まとめる」）の芝崎芽久実さんの報告は参考になる。芝崎さんは、「おもしろくて笑ってしまった行動、うれしかった発見、後になって考えると焦ったり怒ったりしなくてもよかったこと……。それを忘れないように文字を起こすことを続けてきました」と述べ、記録を書く理由を、「子どもたちは毎日違う姿を見せます。（中略）うれしかった成長やびっくりした発見が授業中にあったとき、その瞬間にはこれは書いておかなくては！」と思っても、あとですっかり忘れてしまうことが多々」あるからと述べている。最近では、毎日・全員分書かなくてはから、「書ける範囲、わかる範囲だけでも十分なのだと思うように」なったと述べている。「記録ノートを毎日書く」もあるけれど、今の芝崎さんのように、できる範囲、できる方法で続けることが大切だと思う。

◇連絡帳を活用して、記録を蓄積しよう

現役時代、どんなに忙しくても、保護者との連絡帳はおろそかにしなかった。私の使った連絡帳には、①各時間の授業名と行った内容、②そのときの子どもの様子、③一日の記録・特記事項があった。裏面の「家庭からの

連絡」には、①家での子どもの様子、②保護者からの連絡、意見、質問があった。本学級のほとんどの子どもが自力で食えることができたので、急いで給食を済ませ、連絡帳を書いた。毎日これだけの内容を書くとなると、たとえば授業内容が1ヵ月変わらず発展性が見られないでは、保護者に説明がつかず、書いている自分も自己嫌悪に陥る。また、子どもの様子も良かったこと、がんばったことを書いてもそれに変化がなければ、保護者からの信頼は生まれない。保護者には「わからないこと、疑問に思うこと、何でも聞いてください」といってあったので、2、3ページ分の質問や疑問が届いたこともあった。それにも答えるとなると、連絡帳を書くことかなりのエネルギーが必要だった。

子どもの様子を書く場合、どんな発達の表れや変化があったかを書くことは当然だが、その意味や私の解釈を書くことに最も努力した。

この際、発達の表れや変化もあり、私の発見・解釈があっても、保護者に今、語らない方がよい場合もある。伝える機会を探しながら、前述した記録ノートに書いて、心と脳の記憶装置に留めておいたりしながら、伝える機会を待つこともあった。

こうして蓄積した連絡帳は日々の実践の記録になった。

◆多面的に子どもをとらえるため、 現業の職員や地域の人たちから情報をえよう

実践や連絡帳が独りよがりにならないため、同僚に子どもの姿、様子を聞くことは必要である。私の経験でいえば、同僚特に現業の職員だからこそとらえた子どもの姿、様子は教員が見ていない部分をとらえた貴重なものであることが多かった。学校用務員さんからは、「光ちゃん、いいヤツだよ。庭を掃除していると手伝ってくれるよ」。清掃時間になると教室から消えていた光ちゃんの別な姿である。給食調理員さんからは、「なっちゃん元気いいね、大きな声で『ごちそうさま』」って。明日もおいしい給食つくろうと思うよ」。あれあれ、勉強のときは、自信なさげな声しか聞かないのに。

地域の人たちからの情報も貴重。いたずらが激しく地域の有名人になった学。いつも迷惑かけている自転車屋さんに挨拶したら、「俺の頭を突然たたいたり自転車を手でまわしたりするけど、どうもあれは乗りたいみたいだよ」。私より学の内面をとらえていた。

こうした普段気づかない子どもの姿、様子を知り、それを心と記憶の貯金箱に蓄積すると、記録に膨らみが生まれる。

◆通知表も大切な記録

年に2、3回作成する通知表も大切な記録である。連絡帳が日々の記録なら通知表はもっと長い期間で活動内容や子どもの発達をみた場合、何がいえるのかの記録である。私の学級の通知表は、教科・領域ごとに、今学期取り組んだ教育内容、目標、評価、コメントがある。最も力を入れて書いたのが総合所見。その学期の中心的課題が何であったのか、次にどうつながるのかを書く。保護者がこれからの子育てに少しでも展望が持てるよう書いた。そのとき、私心がけたことは、書物の理論的な言葉を借りず、事実在即し自分の知性・感性からつむぎ出したことばでいねいに書くことだった。

事実をきちんと書くこと、その事実の意味を発達の視点から書くこと、目前の事実を生育歴など時系列で見るとどうか、学級内・学校全体、子ども集団や大人とのかかわりのなかで見るとどうかなどを複眼的・構造的にとらえ、書くように努力した。項目によってはその学期にはできなかったものもあり、それで評価するが、コメントの部分ではなぜ・どうして理由や意味を書いた。なぜ・どうしてを通知表に書くことは、保護者といっしょに子どもの課題を考え合うためであり、自分自身の実践を振り返るためでもあった。

◆実践で生み出された作品等は一級品の記録

作品等が実践の記憶を呼び覚ますことがある。前述した川の学習の後日談、2010年、奈良教育大学の越野和之さんと私は坂爪さんにインタビューした。その際、坂爪さんが障害児学級を担当した小学校や「川がたしざんしてる」が語られた川の合流地点などを实地見学した。小学校の今も校庭にある国旗掲揚塔を見たとき、「公ちゃんが突然登って下りてこれないことがあってね」「坂爪さんは公ちゃん国旗掲揚塔事件が今ここで始まったかのように話し始めた。川の合流点では、子どもが思わず話したといわれる「川がたしざんしてるんだ」も、ここなら話し始めるかもしれない、私は思った。実践で生み出された作品といっていることはや行動は普段は記憶の底にあるが、具体的な事実・事象、作品に出会うと呼び覚まされるのである。

実践で生み出されたこうした作品等は一級品の記録である。たとえば墨がたつぷり、力強く書かれた習字作品を見ると、ある子はあの頃は何に對しても一生懸命だったな、ある子はあの頃必要以上にこだわっていたななど思い出す。そこから、とすると今はなに変わってきている、それにはどんな働きかけがあったのだろうか、どんな発達の原動力が働いたのだろうか、と考えられる。

作文や日記、絵画・工作、実践の映像はそのものにこ

その価値があるが、そこから教育内容や子どもの様子を考
えられる一級品の記録でもある。

◇蓄積された記録を振り返る機会をつくる

皆さんは、日々実践していると、また日々記録を書い
ていると、アレッ? とか、オヤッ? と思うことはな
いだろうか。芝崎さんがいう「おもしろくて笑ってし
まった行動、うれしかった発見、後になって考えると
焦ったり怒ったりしなくてもよかったこと」がそれに当
たる。この感覚はとても大切なことだと思う。アレッ?
オヤッ? と思うことは実践を考察する第一歩だから
だ。

しかし、アレッ? オヤッ? と思っただけではすぐ
に忘れてしまうことも多い。そこで忘れないために意味
づけの作業が必要である。「連絡帳や通知表を書くこ
き」で書いたように、事実を書くだけでなく意味づけや
解釈を書き、それを誰かに伝える（この場合は保護者で
あるが）。そうすると、記憶装置にしっかりと留められる。

その前に、やるべきことは、アレッ? オヤッ? の
記録について同僚と語り合うことである。一緒に実践を
行った同僚が同じように、アレッ? オヤッ? と思っ
たか、思ったとしたらどうして?、思わなくてもどうし
て? と語り合おう。同じ事象を体験しても、人間はそ
れまでに体験した歩みも異なり、培った知性も感性も異

なるので、当然意味づけや見方は異なる。しかし、意味
づけや見方の差異は宝物であり、恐れる必要はない。実
践を深め、人間を見る目を高めるのなら、多くの人と語
り合う必要がある。そういう経過を経て、アレッ? や
オヤッ? が説得力のある事実の発見になる。

私の思い、気づき、主張を込めた 実践報告を書こう

◇おもしろい! と思う実践報告をまねて
書いてみよう

全障研大会や各種の学習会に参加すると、おもしろ
い! わかるわかんと思う実践報告がある。なぜおもしろ
い、わかるわかんと思うかといえば、その実践報告の
書かれた内容（実践スタイルや子どもの見方など）や書
き方が自分の感性に合っているからである。そう思っ
たら、その実践報告をまねて書いてみよう。

実践者として生き直そうと考え数年たった全障研第17
回全国大会（1983年長野）自閉性障害の分科会に実
践の報告をはじめて書いた。当時私を最も悩ませていた
みつる君のレポート。彼の行動の特徴、その行動を理解
したくてもできない私の悩み、同僚たちの素敵な関わり
によって心が少しずつ開いていく様子、同僚に学びなが

ら働きかけを変えた私自身のことをB5判15枚、前年の分科会報告や麦の会に出されるレポートをまねて書いた。整理されないまま書いたのでダラダラしたものになったが、まねてでも長くても実践レポートを書けたことは、その後の品川にとって画期的なことであった。だから、呼びかけたい。自分がおもしろい！と思う実践報告をまねて書いてみよう。

◇思い、気づき、主張を込めた実践報告を書く

実践報告を書くかと思っても、簡単ではない。「まねて書く」といわれても、発達の様子を意味づけるための勉強は不足だし、日々どう働きかけて良いかわからず迷ってばかりだし、活動の準備はしたけれど子どもが逃げちゃった……。悩みはつきない。こんな私でも書けるの？そういうあなただから書ける、だから書いてほしい、と訴えたい。あなたには実践報告執筆の素材である書きためた実践の記録があるではないか、今を変えたいおもいがあるではないか、素敵な活動をしたいねがいがあるではないか。実践報告を書くために必要なのは、こうした切実な課題意識と十分な素材（実践の記録）である。

▼まずレポート名を考えよう

たとえば、ある子どもを書くとする。その子の何を書きたいのか、実践報告のテーマ（レポート名）を何にするのかを決める。先ほどの私の実践レポート名は「意欲

にあふれ、要求のたくさんもてる子に」だった。1、3年のみつる君は、やりたいことが広がらず働きかけるとピーピー泣いてばかり、学校のなかに心の拠り所がない状態で、私たちは要求をもち何でも意欲的にがんばれる子にしたい、と願っていた。6年間の働きかけで徐々に変わる実感がもてたので、このレポート名にした。私の実践への課題意識である。

今年2016年の全障研全国大会に提出されたレポートでいえば、たとえば「はたらくこと」が「暮らすこと」と豊かにつながっていくために」や「自分の思いが実る経験を重ね、自分のつもりを価値あるものにしてきたAさんについて」は、内容が手に取るようにわかるレポート名である。「いのちをいただきます」内省的に生きるⅢ」はいったい何が語られるのか、ドキドキ期待が膨らむレポート名である。レポート名を決めるのは、レポートを書く前でも後でも良い。書く前に考えたことが、書いているうちに変わってももちろん良い。自分の知性・感性をフル動員して考えよう。

▼レポートの見出しを考える1

レポート内容を明らかにするために、実践の記録のなかから何を順番に語ったら良いのか、そのためには何項目の見出しが必要か、ここは考えどころである。

『みんなのねがい』2016年8月号の「子どもからはじめる算数」第5回「ものをとらえる力がついてく分

析・統合の学びから」(北川祐子)では、①「感触を楽しんでいるように見えた愛さん」で実践の対象となる子どもの実態が紹介される。②「納得できる学びを求めて」ではその実態把握の修正と算数の課題の再考が行われる。③「『わかる まとめる』の学習」「一重分類」④「『わかる まとめる』の学習」「二重分類」では算数の実践が紹介される。⑤「2つの関係がつかめるようになって」では、「わかる まとめる」の実践で何をつかむことができたか、まよめとなっている。

この実践報告の執筆のとき、執筆者の北川さんは①と②をどんな内容で書くか、悩み、何度も書き直している。愛ちゃんの実態が見えにくく、課題をつかみにくかったことから迷いが生じていた。はじめ「感触を楽しんでいるかのように見えた愛さん」ととらえていたが、算数の問題に取り組ませ確かめると、それは愛さんの本当の姿でなく、それよりも高い発達のレベルであることに気づく。愛さんは本当はもう少し高い発達のレベルであるが感触のレベルに身を置こうとしている。その行動がベールの役割をし本当の発達の姿を隠しているのではないかととらえ直す。改めて本当の発達レベルと思われる算数の課題に取り組ませると、愛さんは一気にか開いていった。北川さんは悩みながらレポートを書くことを通し、愛さんの発達の姿をとらえ直し、その発達の課題にふさわしい算数の課題を見つけたのである。

このようにレポートの見出しを立てることは重要であり、どう立てるかでレポートの内容がほぼ決まる。

▼レポートの見出しを考える2

編集をお手伝いした『みぬまのチカラ～ねがいと困難を宝に』第一部「みぬま福祉会の歩み」の執筆検討のときのこと。この本はみぬま福祉会30周年記念の出版物であり、第一部はみぬま福祉会の歴史(運動のまよめ)である。

記念出版物の年史を読むと何年に何があったとの記述が多く、これでは運動がどのように発展し、どこで困難が生じ、どう乗り越えたかがわからない、と私は考えていたので、運動の発展がわかる記述にすることを執筆者の理事長や親たちに求めた。子どもにも発達の段階や節があるように、障害者運動にも発展の段階や節があり、矛盾もあり、それを乗り越えるための力も内在する。

これらを見出しにすれば、運動の流れや課題がわかり、今後の運動の見通しも持つことができ、それまで歴史を知らない仲間、家族、職員もみぬまの運動と歴史を理解し自信と展望をもつことができる、と提案した。

『みぬまのチカラ』第一部は見事に応えた。第1章「どんな障害をもつていても希望すればいつでも入れる社会福祉施設をつくらう」、第2章「わが子ともう一人の困難な仲間のために」、第3章「進路保障運動が地域から期待される社会資源づくり」に。章・節ごとに運動の深まりと発展がわかる構成になっている。第1章は運

動の始まりの1節「『不本意な在宅者を出さない』を理念の柱にして」から、今につながる基本方針の4節「施設に仲間を合わせるのではなく、仲間に合った施設をつくらう」になっている。

運動区分・歴史区分である見出しの章を考え、章の内容を明らかにするため、膨大で具体的な運動の事実から必要なものを選び、節とその並び順を考えた。これは、子どもの歩みでも実践の報告でも同じである。レポートを書くとき、試みにそうした手順をとったらどうだろう。

実践報告を深め磨くために、

サークルや学習会等で集団的に検討しよう

◇「きびしくて、あたたかい」麦の会

一緒に草加市の障害児教育をつくった木村さんは、2000年の麦の会夏合宿で「実践を報告するときびしく批判される。その意味ではとてもきびしい学習の場であるのに、同時に『やっぱりここで報告して良かった』と思え、またがんばろうと思える」と述べている。これを紹介した越野さんは、麦の会の実践検討がなぜ「きびしくて、あたたかい」のか、もう少し考えてみたいといっている。

この点で思い当たることがある。田村さんは、若い教

員や職員、麦の会初レポーターにはとてもやさしい。先輩の愛情の表れとして、まずレポートの評価できるところを見つけ出す。レポーターは田村さんの質問や指摘を受け止めながら、自分でも気づかなかった子どもの事実やねがいを知り、自分の実践の良さに気づく。田村さんはその人ががんばれば獲得でき、達成できることを見極め要求した。若い人には「ちょっとがんばれば」を、ベテランには「うんとがんばれば」を求めた。絶妙な塩梅で、ある人には「あたたかくて、きびしい」、別な人には「きびしくて、あたたかい」となる。田村さんのように絶妙な塩梅を見極める力がほしいが、これは個人でなくサークル集団としてつくれるべき力のだろう。

家庭に大きな課題のある子どものレポートが報告されたことがあった。麦の会ではこんなときにはたっぷり時間をかけ、自分の関わった問題がいかに大変なのかを話してもらおう。そうしないと報告者は気が済まないから。話を聞いてもらうだけで気持ちスッキリし、話すことで問題の本質も自ずと見えるものである。抱える問題の大きさがわかるだけに麦の会の仲間はじっくり聞いていたが、「たいへんだね」の共感に止まっていた。そのとき、田村さんは「その子がどれだけ重い荷を背負って生きてきたかはわかった。では、その子にあなたの学級では何をしてやっているんかい」と問いかけた。この問いはきびしい。あなたは同情としての仕事に立ち止まっ

ているのではないか、そうではなく教育の専門家として必要な、やるべき仕事をまず行い、あわせて社会を民主的に作り替える一員として様々な専門家とつながり子どものある困難を変える仕事もすべきと求めたのだった。「あたたかくて、きびしい」麦の会を表すエピソードである。このような互いを磨き合うサークルは今こそ求められているのではないか。

◇実践報告を深め磨くために集団的に検討しよう

実践報告を深め磨くために、どのように集団的に検討したら、良いだろう。私の考えを述べる。

▼たっぷり時間をかけ報告してもらう

前節で、家庭に大きな課題のある子どものレポートが報告されたときは、時間をかけ話してもらうと書いたが、どのレポートもたっぷり時間をかけ報告してもらうことが大切である。

特に若い人や初めて報告する人は何をどう報告するかわからず、要点をまとめてといわれてもどうまとめれば良いかわからない。これは当然であり、誰もが通った道である。だとしたら、レポート報告プラスアルファで思いの文を話してもらいましょう。そのときサークルの仲間は腰を据え聞き役に徹する必要がある。話しているうちに、言いたいことがまとまる場合もある。聞き役も「そのとき、◇◇ちゃんは何ていった?」「あなたもびつ

くりしたでしょう」など合いの手を入れ、話すきっかけをつくったり、忘れていたエピソードを思い出してもらったりすれば、話しやすくなるのではないか。話を聞いてもらうだけで共感してもらうだけで気持ちがスッキリし、話すことで問題の本質も自ずと見えるものである。▼レポートが、子どものねがいや発達の課題に即したものであるか、子どもに生きる喜びといのちを輝かせる文化Ⅱ教材となっているかを明らかにしたか。

▼レポート報告者がサークルの仲間からの意見、評価などに納得し、自分でも気づかなかった子どもの事実やねがいを知ることができたか、自分の実践の良さに気づいたか。レポート内容を書き換える必要があるなら、それが納得できたか。

以下、この二つを検討する。

竹沢清さんは、『子どもが見えてくる実践の記録^①』で「仲間の力をかりて読み解く」として、「記録は、一人で読み取れないことでも、集団で検討し合うなかで、その実践の実態に近づくことができます」と言い切る。「集団での検討の中では、報告者の意図とは別な角度から、参加者の発言がなされ、それによって、思いがけない展開になる場合があります。そこがまた、集団での実践検討のおもしろさでもあります」。続けて、「他者の発言で、新たな目のつけどころを知り、論議の展開そのものを楽しむ」こうした蓄積が、私たちを実践者としてゆた

5)『障害者問題研究』第38巻第4号(全障研出版部、2011年)に執筆した「教育実践サークル『麦の会』における教材分析・実践分析の実践」では、一つのレポート報告をサークルでどのように教材分析や実践分析を行ったかの経過を述べている。

かにしてくれます」と述べる。竹沢さんのような実践検討のプロでも、集団で検討することの良さを述べていて、私は「そうそう」と共感するとともに、実践検討の奥深さを改めて学んだ。

レポート検討で抜きにしてはならないことは、子どものねがいや発達の課題に即したものであるかどうか、子どもに生きる喜びといのちを輝かせる文化・教材となっているかどうか、であると思う。この二つをていねいに吟味することなしにレポートの価値を判断することはできない、と思うからだ。サークルの仲間はこの二点に論議が立ち戻るように心がける必要がある。特に若い人や初レポートの場合には話し合いをすすめるなかで自分のレポートにそれらが見つけ出せるようにする必要がある。それはサークルの仲間の義務であると思う。

▼実践報告は二度も三度も検討されることが必要

麦の会では実践報告が二度も三度も検討され、そのたに実践報告の内容が深まっていくことがある。実践報告は一度検討されたら、それで終わりではない。時を経て検討すると、その間に個々の仲間もサークル集団も新しい考え方や様々な知見などを得ることによって、実践をとらえる視点がひろがったり、力量が高まったりする。その結果、見過ごしていたことや本当は大切だったことを新たに発見できることがある。

実践報告の再検討はいとわなければ、学び直しの過程

を共有でき、報告者の実践でありながらも、自分自身に引き寄せてとらえることができる。それがサークルの学び方であり、魅力である。

実践報告を書くうえで必要なこと

◇子どもの生活やその歴史、家族、地域などの背景への視点を持つこと

実践をすすめるうえで、子どもの生活やその歴史、家族、地域などの背景への視点を持つことは必要であり、実践報告を書くうえでもこれは重要である。

私は教育実践をすすめる際、「子どものできること、好きなこと、得意なこと」を見つけることに心がける。これらは、子どもがこれまで生きてきた総体の中で形成されたものであると思うからだ。だから、その断片でも知る必要がある。そのため、育ちの歩みを知りたいが、たやすくつかめるものでない。保護者は、私が信頼に足る者であるかを見極め、少しずつ伝えることが多い。自分が逆の立場だったら、同じようにする。少しずつ情報を得ながら少しずつ育ちの歩みをつかみ、子どもをとらえ直していく。焦ってはいけない。

同時にこれも少しずつだが、以下のことは知っておく必要がある。まず、家庭でのこと。子どもと両親との向

き合い方、家での育ちの過程、既往歴、家での暮らしぶり、家族関係（父・母、きょうだい、祖父母との関係など）、地域での位置づけ（家族の位置づけ、同年代の子どもの関係）、○○さん家の子育てキーコンセプト。これまでの療育・保育歴、指導経過、子どもの特徴的な様子、申し送り事項など。個別の支援計画や指導記録等、表に表れた行動や記録だけでなく、できれば内面に潜む子どもの思いやねがいをつかむ必要がある。

両親の要求を受け止めることも大切である。どんな子どもに育ってほしいのか、どんな教育を望んでいるのか、とにかく聴き取ること。その中にはびっくりするようなものも含まれているだろうが、それが今のねがいだとしたら、そこからしか共同の子育てが発達できないとしたら、まずは受け止める。一緒にねがいを考え、一緒に失敗することも含め行動し、考え合う。

◇家庭訪問に出かける前に

家庭訪問は今も行われていると思うが、私の家庭訪問の経験。家庭訪問の時期は、子どもが徐々に覚えてくる頃だが、見えるのはできなさや課題であることが多く、「家庭でもガンバってください」といってしまいがち。私もその落とし穴にはまり失敗を繰り返してきた。

家庭訪問に出かける前、「きょうは聞くことに徹するぞ」と自分に言い聞かせるくらいがちょうど良い。見せ

てもらえるなら写真アルバムを見ながら、これまでの育ちや育てを聞く。メモなどとりたたりしないで、全身で話を受け止める。できるなら隣近所を歩いて、地域の空気感に触れる。家に入っても、ことばに頼らず五感を働かせ家全体が醸し出す空気感に触れる。子ども、保護者と同じ場に在ることで見えたり気づいたり感じたりすることがあると思うからだ。

実践的力量を高めるうえで必要なこと

◇多様な学びを、人間的な豊かさを

実践的力量を高めるうえで、私は多様な学びをすることが大切であり、あわせて人間的な豊かさを身につけるため、質の高い文化・芸術にふれる必要があると考える。冒頭で坂爪セキさんに触れたが、最後にもう一度触れたい。「みんなのねがい」全障研30周年インタビュー第2回「障害児に最良の教育を」（1997年5月号）で、私は「演劇や音楽・美術の鑑賞によく東京まで出てこられていましたね。それも実践に生きていますか」と尋ねた。坂爪さんは「観たいから、いくんだけだね。でも、観れば何かがあるよ。それに学校だけにへばりついていると疲れることあるじゃない。ああいういいものがあると気が晴れるがね。気持ちいいことは大事だよ。」

以前、ある施設に見学に行ったら、ねたきりの子がモーツァルトの曲を聞いていて、みんなすごくいい表情しているんだよ。こういうのって大事じゃないかと思う」と答えた。日々会議だ、交渉だに明け暮れる私には耳が痛かったが、印象的な話であった。

実践的力量を高めるうえで必要な多様な学びについて、『障害児学級で育つ子どもたち』で私は語っている。

最近、専門性が問われ研修が強化されるのに、直接授業に関係なければ、音楽・映画鑑賞、美術館めぐり、読書三昧は研修に認められないのはおかしい。ミステリー小説の謎解きや児童文学の主人公の心の揺らぎは、子ども理解のノウハウに通ずる。様々な人生を知らずして、人間理解はすまない。その点、映画や小説はもつともふさわしいものである。「個別の指導計画」は書いても、そこに人生が反映されないようでは、書いていないも同然だと思うからだ。

『みんなのねがい』編集長時代、編集部員に好きなことの二つを専門的に深めつつ、広く興味関心を持ち、いろいろなことに首を突っ込むことを求めた。これは編集に携わる者の資質にかかわることであるが、教員の専門性にも通ずる。おのれの意思でとりこんだ文化・芸術・科学の一切合切が、脳をはじめ身体の内外部で融合し、我が人生・人間性を豊かにし、幅広い意味での教育実践の専門性を形づくると考えるからだ。

◇専門的力量と想像力、人格の形成のために

以上、子どもの生活やその歴史、家族、地域などの背景を知るための具体的方法、実践者が身につけるべき文化的教養について書いてきたが、その前提として、私は次の点を特に訴えたい。それは、親・家族の労働の実態、経済的条件、それに規定されたさまざまな苦労や苦悩を私たち実践者が想像力をどれだけ働かせて、まるで我が事のように感知する人格になりえているか、ということである。もし、そうでないなら、どうしたらよいかという課題である。

私の経験でいえば、教員をはじめすべての人々の生活や権利を守るため教職員組合運動に取り組むこと、障害のある子どもの教育権・発達権を守る運動や障害者の権利保障を求める障害者運動にかかわることが必要であると思う。

それらの運動を通し、親や家族の労働の実態、経済的条件、それに規定されたさまざまな苦労や苦悩にふれ、ともに現状を改革する主体者・同志として連帯していくことができる。実践者の専門的力量と想像力、人格は、こうした社会や人間をとらえる総合的な学習活動と民主的な社会変革をめざす運動の中でこそ形成されると、私は考える。